

教理研究院

天の摂理からみた真の父母様の位相と価値

「真の父母論」の概要

真のお母様を中心とする天の摂理完成の時を迎え、今、「真の父母論」の安着が願われています。「真の父母論」を理解するため、韓国教授陣による七つの映像が準備されています。各講座の「題名」と「概要」をお伝えします。

教理研究院

注 真の父母様のみ言や「原理講論」等は「青い字」で表示しています。

〈映像〉

第1講座

「序論」の概要

神の似姿の実体として創造されたのがアダムとエバ、すなわち「独り子」と「独り娘」である。統一原理は「神における陽性と陰性とを、各々男性と女性と称する」(『原理講論』47ページ)と論じている。

神は「陽性と陰性」の二性性相であり、天の父母(唯一なる「天の父」と「天の母」)である。「神は陽性と陰性の二性性相」(同46ページ)の統一的存在としておられる。真のお父様は「神様は……愛を中心とした統一的存在だということ」は、今まで話さなかったのです。……愛を中心とした統一的存在であることを付け加えなければならぬ(『マルスム選集223-268-269』)と語っておられる。

その神の形象的個性真理体と

しての「神における陽性……男性」の実体が「独り子」であり、「陰性……女性」の実体が「独り娘」である。「独り子」は二千年前に現れたのに、人類歴史において「独り娘」は現れていなかった。

人間始祖アダムとエバが完成していれば、それぞれが天宙の半分ずつを表し、アダムとエバが一体となった位置が、天宙全体を象徴するはずであった(『原理講論』60-61ページ)。天の父母様(神様)の夢は、彼らが完成して真の父母となり、共に暮らすことであった。

しかし、彼らが墮落することによって神(天の父母様)の夢は実現されなかったのである。ゆえに、天の摂理が安着するには「独り子」だけでなく、「独り娘」が現れなければならぬ。二千年前に「独り子」は現れたが、真の父母になれずに天の摂理は完成しなかった。その独り子の使

命を持ってこられた方が再臨のメシヤである。今、六千年を経て「独り娘」が現れることで、「最終一体」をなされた真の父母が顕現し、天の摂理が完成する時を迎えている。その摂理完成の中心軸が、真のお母様である。ゆえに「独り娘」を宣布しなければならぬのである。

〈映像〉

第2講座

「天の父母様」の概要

『原理講論』は、神に対し「父母なる神」(61ページ)、「人間の父母としていまし給う神」(92ページ)、「天の父母なる神」(235ページ)と論述している。

真のお父様は二〇一〇年の

「真の神の日」の祈祷で、神に対し「天の父母様(하늘의 부모님)」と呼びかけて祈られた。神は天の父母様であり、これは二元論ではない。

真のお父様が「私たち一般人が普通『天のお父様!』と言うのは、お一人ですからそのように言うのでしようが、そのお一人という概念の中に『天のお父様、お母様』という概念が入っている」(マルスム選集140-124)と語っておられる。ここから明らかである。

そして、『原理講論』に「真理の目的は善を成就するところであり、……この真理によって到達する世界は……神を父母として侍り、人々がお互いに兄弟愛に固く結ばれて生きる……世界でなければならぬ」(33ページ)とあるように、天一国は神を父母として侍る世界である。今や「基本元節」が宣布され、天一国安着時代を迎えたため、

神様の名称を「天の父母様」というのは「真理によって到達する世界」に突入しているからである。

今まで、神を「天の父」とだけ呼んできた理由について、真のお父様は、「創造の目的は何か。天の父母が基本目的であるが、『父なる神様』とだけなっており、いまだに創造目的が完成できずにいるのである。神様が父格としておられるのは、創造目的を果たせなかったことを意味するものである……」

このように墮落によって天の父母は完成されず、地の父母も非原理的な状態になったのである。……アダムとエバが完成して神様と合体すれば、父なる神様と母なる神様として完成し、基本完成をすることになる(『天の父母様聖会』天苑社、162-163ページ)と語っておられる。ここで「天の父母が基本目的

である」とあるように、今や「創造の目的」を完成する天一国時代を迎えているため「天の父母様時代」となっているのである。

〈映像〉

第3講座

「キリスト教の二千年歴史の本質」の概要

人間始祖アダムとエバは、独り子・独り娘として神様の夢である理想世界を実現しなければならなかった。しかし、彼らが「墮落したので、独り子がいなくなり、独り娘がいなくなつた」(マルスム選集285-24)

のである。そのため神は血統復帰の摂理をしながら、独り子と独り娘を誕生させる摂理をされた。二千年前、独り子・イエス様が誕生したが、イエス様は独り娘を探し出すことができず、

真の父母になれなかった。

それゆえ、真のお父様は「神様の二千年の(キリスト教)歴史は、新婦を求めるための歴史です。イエス様は、真の息子の姿で現れましたが、真の娘の姿がないので、神様のみ旨を成し遂げることができませんでした。ですから、二千年のキリスト教の歴史は、娘(独り娘)を求めるための歴史です」(同7-304)と語っておられる。

キリスト教の歴史は、独り子の使命を持ってこられる再臨のメシヤを迎える歴史であったとともに、「娘(独り娘)を求めるための歴史」であった。

なお、宗教改革はルターに始まり、カルヴァンに受け継がれたが、カルヴァンは一五四三年頃に「教会改革の必要について」という論文を神聖ローマ帝国議会と皇帝に提出し、その約四百年後の一九四三年に独り娘・真のお母様がお生まれになったの

である。

また、プロテスタント教会の「三大主流」は、ルター派教会、聖公会、長老派（カルヴァン派）であるが、この長老派の流れからピューリタン（清教徒）が生まれ、韓国キリスト教の基盤ともなっている。この長老派教会は、カルヴァンが「教会規程」（一五四二年）を定めたことが出発点である。

ゆえに、カルヴァンの宗教改革は、独り娘を迎えるための神の摂理であり、その独り娘の誕生によって「小羊の婚宴」が舉行されるようになった。

〈映像〉

第4講座

「六千年を経て降臨された初臨の独り娘・真のお母様」の概要

『原理講論』に「ノアの家庭

を中心とする復帰摂理は完成されなかったのであるが、神は……み旨を絶対的なものとして予定し、かつ摂理なさるので……神はアブラハムを召命なさるようになった」（315ページ）とあるのと同様に、ユダヤ民族の不信によって摂理が失敗に終わる可能性を神は予見（モーセが岩を二度打った失敗、エリヤの使命未完成）し、その時のため、前もって、新たな民族を定め、絶対的なみ旨が成就できるように準備しておられた。

真のお父様は、次のように語っておられる。「真のお母様の韓氏（の先祖）は、今から四千三百年以前に、千年歴史を綴ってきたのです。三千年、四千年、五千年、六千年歴史と連結することのできる先祖が誰かと言えば、東夷族であり、韓氏なのです。清州が本貫になっ

ています。……清州は韓氏の故郷なのですが、そのような宗族たちの源流の地（東夷族）であったというのです」（二〇一二年「真の父母様御聖誕日記念出版」版のマルスム選集613-155）。

このように、神は「今から四千三百年以前に……六千年歴史と連結することのできる先祖」を持つていた「東夷族であり、韓氏」を、神の摂理成就のために準備しておられた。この韓民族の基盤の上で、独り娘が誕生するようになった。

神が特別に準備した神霊集団の信仰を持つ趙元模ハルモニ、洪順愛大母様のキリスト教の家系から、独り娘が誕生した。この初臨の独り娘は、天の父母様と一問一答し、行くべき道をはっきり知る中で成長され、聖婚に臨まれた。真のお父様は、「韓鶴子という、このように素晴らしい女性を韓国に送ってく

ださったのですね。ありがとうございます」(「人類の涙をぬぐう平和の母」97ページ)と語っておられる。

〈映像〉

第5講座

「イエス様の使命を引き継いだ再臨のメシヤ・真のお父様」の概要

独り子と再臨のメシヤとの「関係」について理解を深めなければならぬ。神（天の父母様）は創造目的を成し遂げるため、人間始祖の一男一女を創造し、彼らが成長して真の父母となり、人類一家族世界を築くことを願われた。しかし、彼らが墮落すること、その夢は成し遂げられなかった。

神は救援摂理をされ、墮落したアダムとエバの代わりとなる人間始祖、独り子、独り娘を創造されるのである。二千年前、独り子・イエス様は誕生したが、独り娘と聖婚できず、真の父母になることができなかった。

イエス様が果たせなかった独り子の使命を持ってこられる方が再臨のメシヤである。すなわち「再臨主は、初臨のときの復帰摂理路程を蕩減復帰しなければならぬので、あなたも彼の初臨のとき……の苦難の路程を……再臨のときにおいても……再び実体をもって蕩減復帰されなければならぬ」（『原理講論』427ページ）とあるとおりである。

ところで、真のお母様は「神様は……始まりと終わりが同じ方」（『世界家庭』二〇二四年一月号5ページ）と語っておられる。

本来、エデンの園で一男一女であるアダムとエバが「聖婚式」を挙げ、真の父母になるのが神様の夢であった。ゆえに人類歴史の終末期に独り娘が現れ、神様の夢である「聖婚式」がなされなければならない。

エデンの園（創世記）で果たせなかった「始まり」の出来事を、終末期（再臨のメシヤの時）に「終わり」の出来事として「聖婚式」を挙行するのがヨハネの黙示録第十九章の「小羊の婚宴」である。それでこそ「神様は……始まりと終わりが同じ方」となり、始まりと終わりが一致する。

この観点から見たとき、真のお母様が「再臨メシヤの責任をなさなければならぬ方は、独り娘に出会う前に自由に家庭を持つてはいけません」と語られるのは、創造原理的な観点からのみ言なのである（この詳細については『世界家庭』二〇二四

年四月号の「解説」を読むようお願いいたします）。

こうして「始まり」と「終わり」が一致する「聖婚式」の挙行によって、永遠に唯一なる人類の「真の父母」である文鮮明・真のお父様と韓鶴子・真のお母様が顕現された。

〈映像〉

第6講座

「天一国安着の主要摂理」の概要

真のお父様は、真の父母の「最終一体」を宣言された。聖和後には「お母様が責任を持つ」（マルスム選集318-260）と明確にされた。

「先生が霊界に行けば、お母様が統一教会の教主にならなければならぬ」（同499-184）、「夫が成せなかったこと

を成し遂げなければなりません」（同540-73）と語られ、聖和前の四月二十一日の「特別集会」で「女性尊重時代が来ます。お母様を中心として、ひっくり返るのです。男女が同等で対等の価値の実権をつくる」とおっしゃり、聖和時に「オンマ、頼んだよ」（真のお母様による「真のお父様への書信」と願いを託された）。

真のお母様は二〇一三年天曆一月十三日に「基元節」を宣布され、真のお父様が「夫が成せなかったことを成し遂げなければなりません」と語られたこと、天一国時代のさまざまな取り組みをされ、「神民族メシヤ」を本格化。天一国憲法の頒布、天一国經典の編纂。天一国のための伝道、伝道環境創造（天苑団地）、未来人材育成（UPA）などに取り組まれた。

また、侍墓精誠三年路程を歩まれ、その基台の上で「孝情」

を宣布。「基元節」の宣布後の七年路程では、七つの国家、七つの宗教団体、大陸復帰の条件を立て、二〇二〇年に「天一国安着」を宣布された。同年十月「天寶家庭登載」がなされ、この天寶家庭登載について、真のお母様は、「祝福家庭を神氏族メシヤとして天寶苑に入籍させる」という私の決意は、お父様のための、私の贈り物」と語られた。

さらに、「天一国安着」の宣布後の同年五月八日に「天の父母様聖会」を出帆。二〇二七年までに人類の三分の一以上を抱く七年路程を新たに出發された。

また、二〇二〇年十月十一日、情心苑を「天心苑」に改名。天心苑摂理（天心苑特別徹夜精誠）が進められる中、天苑宮プロジェクトが推進されている。「天苑宮」とは天一国の中央庁の役割を果たし、「天一聖

殿」が奉獻されれば、天一国の民は地上で、天の父母様に侍るようになり、直接主管圏時代が開かれる。

真のお母様と共にある今の時代こそ「黄金期」なのである。

〈映像〉

第7講座

『統一原理』から見た 真の父母様の生涯 の概要

真のお父様は、独り娘・真のお母様について「墮落していないエバを探し出して、小羊の宴会をしなければなりません」

（『祝福家庭と理想天国（一）』584ページ）、「主がこの地上で探される新婦は……墮落していない純粋な血統をもって生まれた方を探す」（同909ページ）、「鶴子様は……神様を根として初めて、歴史上に……現れ

た主人公だ」（マルスム選集1 48-41）と語っておられる。すなわち、真のお母様は無原罪誕生である。

さて、第一原因者の神は「天の父母様」であられるため、その実体対象となるには「父母」でなければならぬ。男性一人では、天の父母様の完全なる実体対象にはならないからである。

本来、エデンの園のアダムとエバが完成して「真の父母」となり、天の父母様の完全な実体とならなければならなかった。

三段階の生涯路程があり、第一の路程は誕生から「聖婚」に至るまでの準備期間である。

アダムとエバは「聖婚」すべからずであったが、彼らは墮落し、「聖婚」できなかつた。独り子・イエス様も「聖婚」できなかつたが、それは聖霊が実体をもって地上に誕生できなかったためである。その独り子の使命を

持つてこられた真のお父様は、このバトンを引き継ぎ、独り娘の真のお母様を探し出し、一九六〇年に「聖婚」された。これが、小羊の婚宴である。

生涯路程の第二の路程は「聖婚」以降の歩みである。「聖婚」以降、真の父母として人類の救いのため生まれ、真の父母様は途方もない苦勞をされた。真のお父様の摂理に対して真のお母様は絶対基準を立てられ、多くの行事や大会、680回以上の巡回講演を命懸けで歩まれた。

生涯路程の第三の路程は「基元節」以降の摂理完成の内容である。すなわち、天の父母様の聖殿である「天一聖殿」を天苑宮に建立し、天の父母様の実体である真の父母様の生涯路程を「14の壁画」に表し、天一国民が天地人真の父母様を永遠に礼賛するのである。